旧課程と現課程の中高英語教科書の難易度比較
―中高６年間の教科書難易度の推移―

大　田　悦　子

1. 研究背景

現行高等学校学習指導要領（2009）で､｢コミュニケーション英語｣（以下「コミュ英」）が新設された。中学校で扱う言語材料が旧学習指導要領（1998）より増加したことを受け、高校で「コミュ英Ⅰ」で扱うことのできる語い数も、旧学習指導要領（1999）の「英語Ⅰ」より増加したことになる。また、指導すべき文法事項（不定詞、関係代名詞、関係副詞、助動詞、代名詞 it の名詞用法、動詞の時制、仮定法、分詞構文）が、原則として、唯一の必修科目である「コミュ英Ⅰ」ですべて扱われることとなった。ここから､これらの影響を受け「コミュ英Ⅰ」の本文難易度が旧課程時の教科書本文よりも上昇したのではないかと推測した。そこで、Lexile Measure（これについての説明は、**3. テキスト難易度の指標**を参照）という text readability を示す数値を用いて、教科書タイトルが新旧同一の「コミュ英Ⅰ」と「英語Ⅰ」の任意８組の教科書英文難易度比較を試みた。

分析対象８組の教科書のうち、７組の「コミュ英Ⅰ」の Lexile Measure が「英語Ⅰ」の Lexile Measure よりも高く、８冊平均で「コミュ英Ⅰ」777L､｢英語Ⅰ」711L という結果になった（大田, 2015）。「コミュ英Ⅰ」の授業の進め方として、現行学習指導要領では「聞いたことや読んだことを踏まえた上で話したり書いたりする言語活動を適切に取り入れながら、四つの領域の言語活動を有機的に関連付けつつ総合的に指導するものとする」と明記されている。つまり、４技能をバランスよく授業に取り入れなければならないということである。「聞く」「読む」という受容系の活動だけでなく、「話す」「書く」といった表出系の活動も積極的に行わなければならないのである。それなのに、そこで扱う教科書英文の難易度が、旧課程で使用していた教科書英文の難易度とはさほど変わらない、もしくはそれよりもやや上昇しているという結果は、どのように解釈すべきであろうか。

教科書の英文難易度が高いということは、内容理解により時間がかかるということを意味する。１回の授業時間、年間の授業時数は決まっているので、内容理解に時間がかかれば、その分、授業で言語活動に使える時間は減ることに

なる。

日本は、教室を一歩出ると、学習対象言語である英語に触れる時間・機会が極端に少なくなる EFL（English as a Foreign Langueage）環境にある。その中では、英語学習の主たる場所である「教室」において、英語を使用する機会が学習者にできる限り多く与えられなければならない。

大田（2015）で、「コミュニケーション能力の育成」という目標に沿った教科書のレベル設定が必ずしも行われていないと論じた。この、旧課程の「英語Ⅰ」より現課程の「コミュ英Ⅰ」の方がやや難しくなっているという傾向が、「コミュニケーション英語Ⅱ」（以下「コミュ英Ⅱ」）と旧課程「英語Ⅱ」でも見られるのかどうか、引き続き検証した。

その結果、やはり同タイトル 8 組の教科書に限定した分析結果にはなるが、「コミュ英Ⅱ」8 冊の平均が 915L、「英語Ⅱ」8 冊の平均が 904L で、ほぼ同程度の Lexile Measure が確認された（大田，2016）。難易度が上がっているとは判断できないにしても、「コミュニケーション活動」に最適な教材難易度かどうかという視点で再び数値を眺めた場合、900L を超える教科書が本当に妥当な学習教材といえるかどうかという疑問が残る。大学入試センター 2012 年度（英語）の長文問題の Lexile Measure が平均で 1030L だった（根岸，2015）ことから判断すると、読解教材には適切かもしれない[1]。ただし、内容理解の先の表現活動にまで生徒を誘導していけるかという話になれば、もう少し慎重に考えるべきではないだろうか。

2.「コミュニケーション活動」とテキスト難易度との関係

現行高等学校学習指導要領によると、「コミュ英Ⅰ」の授業では「事物に関する紹介や対話」を聞いたり「説明や物語」などを読んだりして「情報や考えなどを理解したり、概要や要点をとらえたりする」ことが、学習の第 1 ステップとなる。つまり、聞くことや読むことからスタートする。進学校と呼ばれる高校で英語指導にあたる教師は、現実的には 4 技能の中の「読み」をかなり重視している。その先の大学入試を見据えてのことだろうが、高校での授業は読解中心であるべき、という固定観念も影響していると思われる。

しかしながら、授業は「読み」で終わるべきではない。現行学習指導要領に

---

[1] 補足として、大学入試センター 2016 年度（平成 28 年度）本試験の問題のうち、第 5 問（物語文）と第 6 問（説明文）の Lexile Measure と 1 文の平均語数を調べた。第 5 問は 830L・1 文平均 13.58 語、第 6 問は、1120L・1 文平均 16.42 語であった。

おいても、きちんとその先が期待されている。「聞き手に伝わるように音読」したり「情報や考えなどについて話し合ったり、意見の交換をしたり」、時にはその内容を「簡潔に書く」場面へつなげていくことが求められている。（以上、高等学校学習指導要領、第 2 章第 8 節、外国語、コミュニケーション英語Ⅰ、2. 内容）

音読、情報・意見の共有、ライティングといった表出系の活動は、当然「聞いたり読んだりしたこと」をベースにして行うことになる。つまり、授業でどの程度のレベルの教材を使用するのかが、その先の表現活動の実行可能性を大きくも小さくもする。読むことで始まり読むことで終わってしまう、伝統的な授業形態から脱却するために、どの程度の難易度の教科書が適切なのだろうか。この情報が今後は必要になってくるはずである。積極的にコミュニケーションを図ろうとする「態度」と「能力」の両面の育成を考える上で、まず、進学希望者を抱える平均的な高校が使用していると思われる教科書がどの程度の難易度かという実態調査が不可欠と判断し、高校英語教科書の難易度を過去 2 年にわたり、段階的に調査してきた。

3. テキスト難易度の指標

文章の Readability を示す指標として、日本でも認知度が高いものに、Flesh Reading Ease と Flesh-Kincaid Grade Level がある。前者は 100 を最高値とし、数値が高いほど当該英文の難易度が低い（＝読みやすい）、逆に、数値が低いほどその分難易度が高いことを示す。後者は、当該英文の難易度がアメリカのどの学年度の児童・生徒の読解レベルに相当するかを示す値である（大田, 2016）。本来は英語母語話者用の数値であるが、英語学習者用の教材の英文難易度を確認するツールとしても、広く普及している。

一方、本研究を含めた 3 か年の教科書分析では、**1. 研究背景**で述べた通り、Lexile Measure という指標を Flesh Reading Ease、Flesh-Kincaid Grade Level と合わせて使用している。L を単位とし、例えば 450L や 730L という数値で示される。米 MetaMetrics 社によって開発されたこの測定単位は、英文の Readability を示すことができるという点においては、Flesh Reading Ease や Flesh-Kincaid Grade Level と同等である。しかし、この Lexile Measure は、英文の Readability（文章の読みやすさ）だけでなく読み手の Readability（読解力）も、同一尺度（＝同じ単位）で示すことができるという利点を有する。この点が、先の 2 つの Readability とは異なる特徴である。

仮に、ある学習者が辞書や教師の補助をあてにせず、書かれている内容を 7

割～8割理解したい場合、自分のLexile Measureとおおよそ同じLexile Measureの数値を持つ本を読めば、さほどストレスを感じず読み進めることができると言われている。例えば、自分のReadabilityが1000Lである学習者が1000Lのペーパーバックを選べば、辞書を使わずに75％程度は理解できると想定されている（表1①参照）。さらに、多読のように、辞書を使わず教師の補助もほとんどあてにしないで、自力でさくさく読み進めたければ、自分のReadabilityの75％くらいのLexile Measure（1000Lの学習者であれば750Lかそれ以下の難易度）の本を読めば丁度よい（表1②参照）、といった判断材料に使うことができる数値である。

（表1）読み手のReadability、文章のReadabilityと理解度との関係[2]

読み手のLexile Measure	本のLexile Measure	文章の理解率
1000L	750L ②	90％
	1000L ①	75％
	1250L	50％
	1500L	25％

（Amazon.co.jp “The Lexile® Framework for Reading” の表を改編）

大田（2015, 2016）と本研究は、教科書分析に特化した研究である。しかし、その後の研究として、「どのくらいの読解力を持った生徒がどのくらいの難易度の教科書を授業で使用しているのか」に関する実態調査を行うことを当初から計画していたので（2016年11月現在、調査実施中）、冒頭で挙げた2種類の指標と合わせ、このLexile Measureを、教科書分析の段階から使用することにした。

4.「Reading」と「コミュケーション英語Ⅲ」の学習指導要領における内容と目標

2014年度に「コミュ英Ⅰ」と「英語Ⅰ」の難易度比較を行い（大田, 2015）、2015年度に「コミュ英Ⅱ」と「英語Ⅱ」の難易度比較を行った（大田, 2016）。本研究はその一連の教科書分析の最終回として、「コミュ英Ⅲ」と、旧課程の「Reading」の難易度を比較することにした。

「コミュ英Ⅲ」は、一般的にはコミュ英Ⅰ（通常1年次に履修）とコミュ英

[2] https://www.amazon.co.jp/b/?node=3948232051

Ⅱ（通常2年次に履修）の後に、3年次で履修される科目である。それに対し、「Reading」は、旧学習指導要領において「オーラル・コミュニケーションⅠ」または「英語Ⅰ」のいずれかを履修した後であれば履修が可能な科目だったため、必ずしも3年次で履修されたわけではない。学校によっては、2年次に「英語Ⅱ」と並行して履修させるケースもあった。ただ、少なくとも「英語Ⅱ」の前段階と位置づけられた科目ではないことと、当時の一般的な履修順序「英語Ⅰ」→「英語Ⅱ」→（または＝）「Reading」から判断し、今回の「コミュ英Ⅲ」との比較に至った。

旧課程「Reading」は他の3技能も織り交ぜながらではあるが、文字通り「読むこと」を中心とした科目であった。一方で、現課程「コミュ英Ⅲ」は4技能を統合して行うことがより強調された科目である。表2内の下線部で分かる通り、読み方一つを取っても、従来の授業で典型的に行われていた「精読」だけでなく、「速読」も訓練していくことが奨励されている。また、読んだ文章を音読するだけでなく、「暗唱」活動にまで引き上げるといったような話す側面の訓練や、「まとまりのある文章を書く」といったような書く側面の訓練も同様に奨励されているのが、この「コミュ英Ⅲ」の特徴である。

つまり、「コミュ英Ⅲ」は、旧課程の「Reading」以上に「話す」「書く」側面が重視されている科目である。ゆえに、読解を中心とした科目で使用していた教科書と同程度の難易度の教科書を使用してしまうと、授業展開は当然のことながら難しくなると予想される。

（表2）（旧）「Reading」と（現）「コミュ英Ⅲ」の学習指導要領の「内容」の比較

（旧） 「Reading」	－ まとまりのある文章を読み、必要な情報を得たり、概要や要点をまとめたりする － まとまりのある文章を読み、書き手の意向などを理解し、自分の考えをまとめたり伝えたりする － 物語文などを読み、感想を話したり書いたりする － 文章の内容や自分の解釈が聞き手に伝わるように音読する
（現行） 「コミュ英Ⅲ」 ※コミュ英Ⅱの2. 内容（1）を更に発展させて行う、と記載。	－ 説明、評論、物語、随筆などについて、<u>速読したり精読したりする</u>など目的に応じた読み方をする － 聞き手に伝わるように<u>音読や暗唱を行う</u> － 聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどについて、話し合うなどして結論をまとめる － 聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどについて、<u>まとまりのある文章を書く</u>

（表 3）（旧）「Reading」と（現）「コミュ英Ⅲ」の学習指導要領の「目標」の比較

（旧） 「Reading」	英語を読んで、情報や書き手の意向などを理解する能力を更に伸ばすとともに、この能力を活用して積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。
（現行） 「コミュ英Ⅲ」	英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする能力を更に伸ばし、社会生活において活用できるようにする。

※表 2･3 の内容は「高等学校学習指導要領（1999）第 2 章第 8 節外国語第 5 リーディング」および「高等学校学習指導要領（2010）第 2 章第 8 節外国語第 3 コミュニケーション英語Ⅱ」「第 2 章第 8 節外国語第 4 コミュニケーション英語Ⅲ」から引用。表 2 については文言を編集。表 3 についてはそのまま抜粋。

5. 研究の目的

本研究の目的は、大田（2015，2016）の追調査として「Reading」と「コミュ英Ⅲ」の英文難易度比較を行い、旧課程と現課程の中学・高校検定教科書の難易度推移を総括することである。

5.1 研究課題

以下 3 点が、今回の Research Questions である。

(1)「コミュ英Ⅲ」の教科書本文と旧課程「Reading」の教科書本文の読みやすさを Lexile Measure で示す場合、どのような違いが見られるか？

(2)「コミュ英Ⅰ」から「Ⅲ」へかけて、Lexile Measure と 1 文の平均語数はどのように推移しているか？

(3) 中学検定教科書 Book 1 ～ 3 から「コミュ英Ⅰ」～「Ⅲ」の 6 段階を縦断的に見た場合、Lexile Measure と 1 文の平均語数はどのように推移しているか？

5.2 方法

5.2.1 分析用高校検定教科書

Research Question（1）で分析対象とするのは、大田（2015，2016）で対象とした教科書と同一タイトルの現課程版の「コミュ英Ⅲ」および旧課程版の「Reading」の各 8 種類（計 16 冊）である。

Research Question（2）で分析対象とするのは、前段で言及した RQ（1）用の新規 16 冊と、大田（2015，2016）で対象とした 32 冊である。

5.2.2　分析用中学検定教科書

Research Question（3）で分析対象とするのは、中学検定教科書平成 28 年度改訂版の 6 冊× 3 学年分、計 18 冊である。

（表 4）分析対象の高校検定教科書一覧（新規分）

	旧学習指導要領《Reading》	現行学習指導要領《コミュ英Ⅲ》	出版社
1	ELEMENT English Reading	ELEMENT English Communication III	啓林館
2	Crown English Reading（New Edition）	Crown English Communication III	三省堂
3	PRO-VISION ENGLISH READING（New Edition）	PRO-VISION English Communication III	ピアソン桐原
4	UNICORN ENGLISH READING（NEW EDITION）	UNICORN English Communication 3	文英堂
5	PROMINENCE English Reading	PROMINENCE Communication English III	東京書籍
6	WORLD TREK ENGLISH READING（NEW EDITION）	WORLD TREK English Communication III	桐原書店／ピアソン桐原
7	Power On English Reading	Power On Communication English III	東京書籍
8	BIG DIPPER Reading Course	Big Dipper English Communication III	数研出版

（表 5）分析対象の中学検定教科書一覧（新規分：H28 年度版）

	教科書	出版社
1	COLUMBUS 21 ENGLISH COURSE 1, 2, 3	光村図書出版
2	NEW CROWN ENGLISH SERIES New Edition 1, 2, 3	三省堂
3	NEW HORIZON English Course 1, 2, 3	東京書籍
4	ONE WORLD English Course 1, 2, 3	教育出版
5	SUNSHINE ENGLISH COURSE 1, 2, 3	開隆堂出版
6	TOTAL ENGLISH NEW EDITION 1, 2, 3	学校図書

5.3　分析手順

本調査では、大田（2015，2016）での手順と同じく、まず上記に挙げた高校検定教科書「Reading」と「コミュ英Ⅲ」の 8 組（計 16 冊）、および中学検定教科書 H28 年度改訂版 6 冊× 3 学年分（計 18 冊）の合計 34 冊の全てのレッスンの本文をテキストファイル化した。

そして、それらを Lexile Analyzer という分析ツールを使って Lexile Measure

を算出した。大田（2016）同様、インターネット上の無料版[3]ではなく、米Metametrics 社から使用を許可された一度に 1000 語以上を扱うことができる professional 版を使い、教科書毎に全レッスンを一つのまとまったテキストとして扱い、分析にかけることにした。

さらに、大田（2015, 2016）と同様、教科書本文をワードファイル化し、それぞれの教科書の難易度を Flesch Reading Ease と Flesch-Kincaid Grade Level でも提示することによって、Lexile Measure の妥当性も確認していくことにした。

6. 調査の結果および考察

6.1 「コミュ英Ⅲ」と「Reading」の難易度比較

6.1.1 Lexile Measure で比較した場合

今回対象の 8 組の「コミュ英Ⅲ」と「Reading」の Lexile Measure の平均値は、それぞれ、1056L と 996L であり、「コミュ英Ⅲ」の平均値の方が 60L 高いという結果になった。これは大田（2015）での「コミュ英Ⅰ」777L と「英語Ⅰ」711L の 66L の差と類似している。ただし、教科書によっては「Reading」の方が Lexile Measure が高かったり、「コミュ英Ⅲ」が高いにしても、教科書間でその差に大小があったりしたので、結論を導くには、本来はより多くの教科書を対象とすべきではある。それでもなお、今回分析対象とした 8 組の比較の結果からは、「コミュ英Ⅲ」が旧課程の「Reading」よりやや難しくなっていると

（表 6）Lexile Measure で比較する「コミュ英Ⅲ」と「Reading」の難易度

教科書タイトル	コミュ英Ⅲ	Reading	コミュ英Ⅲ－Reading（差）
ELEMENT	1100	1060	40
CROWN	970	1020	-50
PRO-VISION	1060	990	70
UNICORN	1220	1020	200
PROMINENCE	1150	1070	80
WORLD TREK	1010	890	120
Power On	940	950	-10
BIG DIPPER	1000	970	30
Mean	1056	996	60

[3] http://lexile.com/analyzer　登録すれば誰でも利用可。ただし、1 回につき 1000 語以内の文章しか分析できないという制限あり。

いう傾向が見えてくる。

6.1.2　Flesch Reading Ease および Flesch-Kincaid Grade Level で比較した場合

次に、先ほど Lexile Measure を通して見た傾向が、Flesch Reading Ease および Flesch-Kincaid Grade Level を使った場合でも同様に見られるのか、確かめてみた。

Lexile Measure で見た場合では、8 組の教科書のうち、2 組（CROWN と Power On）で「Reading」の方の数値が高かったものの、それ以外の 6 組では「コミュ英Ⅲ」の方が数値が高かった。一方、Flesch Reading Ease では、8 組中 1 組（ELEMENT）のみで「Reading」の数値の方が低く、残り 7 組はすべて「コミュ英Ⅲ」の数値の方が低かった。「コミュ英Ⅲ」の Flesch Reading Ease の平均値は 61.4、「Reading」の Flesch Reading Ease の平均値は 66.4 であり、平均値から判断して、Lexile Measure の場合と同じく、「コミュ英Ⅲ」の方がわずかに難しい英文であると言えそうである。

Flesch-Kincaid Grade Level で比較した場合も、同様の傾向が確認された。教科書によっては、0.1 や 0.2 といったわずかの差しかないものもあるが、8 組中どれ一つとして「Reading」の Grade Level の方が高く出た教科書はなく、平均値でみても、「コミュ英Ⅲ」は 8.7、「Reading」は 7.6 と、約 1 学年度分の開きが確認された。

（表 7）Flesch Reading Ease および Flesch-Kincaid Grade Level で見る「コミュ英Ⅲ」と「Reading」の難易度

	Flesch Reading Ease				Flesch-Kincaid Grade Level			
	コミュ英Ⅲ	難＞易	Reading	差（Ⅲ－Reading）	コミュ英Ⅲ	難＞易	Reading	差（Ⅲ－Reading）
ELEMENT	61.3	＜	58.8	2.5	9.0	＞	8.9	0.1
CROWN	65.4	＞	66.9	-1.5	7.9	＞	7.8	0.1
PROVISION	60.5	＞	72.4	-11.9	9.0	＞	6.4	2.6
UNICORN	54.1	＞	63.2	-9.1	10.7	＞	8.2	2.5
PROMINENCE	57.5	＞	63.4	-5.9	9.5	＞	8.2	1.3
WORLD TREK	62.8	＞	70.9	-8.1	8.0	＞	6.5	1.5
Power on	67.7	＞	69.7	-2.0	7.3	＞	6.7	0.6
BIG DIPPER	62.0	＞	65.5	-3.5	8.0	＞	7.8	0.2
Mean	61.4	＞	66.4	-4.9	8.7	＞	7.6	1.1

以上、Lexile Measure / Flesch Reading Ease / Flesch-Kincaid Grade Level の 3 つの Readability の指標を使って新旧の教科書難易度を比較した。結果をまとめると、全体的には「コミュ英Ⅲ」は「Reading」から英文難易度がやや上昇したと言えそうである。Raw data に表れた数値の差は誤差の範囲とも考えられるが、「コミュ英Ⅲ」が「Reading」よりもコミュニケーション活動がしやすい、つまり、内容理解にかかる時間を短縮してその後の活動にまで発展できそうな英文である、という判断はできそうにない。

6.2 「コミュ英Ⅰ」から「コミュ英Ⅲ」への難易度の推移

次に、「コミュ英Ⅰ」→「コミュ英Ⅱ」→「コミュ英Ⅲ」と移行するにつれ、難易度がどれくらい変化したのかを、Lexile Measure と Flesch-Kincaid Grade Level の 2 つで確認することにした。

6.2.1 Lexile Measure で見る推移

表 8 および図 1 で示す通り、すべての教科書において、コミュ英Ⅰ→Ⅱ→Ⅲと右肩上がりに Lexile Measure が上がっている。つまり、難易度が徐々に上昇しているということである。学年が上がるにつれ、教材も少しずつ難しくなるべき、という考え方が正論であれば、この結果に異論の余地はない。しかし、果たして、学年が上がるにつれ、生徒の英語力（教科書の内容をベースにして言語活動を行うことができる運用力）も確実に上がっているのだろうか。これについては、後ほど考察したい。

（表 8）Lexile Measure で見るコミュ英Ⅰ～Ⅲへの推移

教科書タイトル	コミュ英Ⅰ	コミュ英Ⅱ	コミュ英Ⅲ
ELEMENT	721	1040	1100
CROWN	759	880	970
PROVISION	883	1010	1060
UNICORN	818	990	1220
PROMINENCE	932	1030	1150
WORLD TREK	687	740	1010
Power on	785	820	940
BIG DIPPER	630	810	1000
Mean	777	915	1056

（大田（2016）を改編）

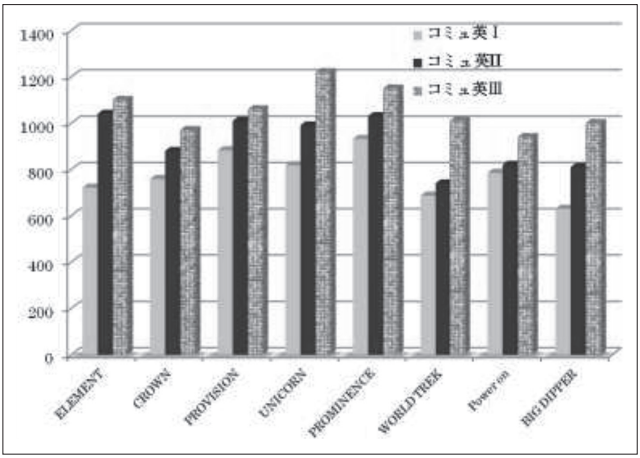

図 1　Lexile Measure で見るコミュ英Ⅰ～Ⅲの推移

6.2.2　Flesch-Kincaid Grade Level で見る推移

この推移を、Flesch-Kincaid Grade Level でも見てみることにする。表 9 および図 2 が示す通り、先ほど 6.2.1 において見た Lexile Measure の推移と同様の傾向が見て取れる。やはり、どの教科書とも、コミュ英Ⅰ→Ⅱ→Ⅲと右肩上がりに数値が上がっている。「コミュ英Ⅰ」と「コミュ英Ⅱ」については、平均値で 1.2 の学年差があった（大田，2016）。今回「コミュ英Ⅱ」から「コミュ英Ⅲ」への変化を見ると、そこで再び 1.2 の学年差があった。「コミュ英Ⅰ」がアメリカの学年度でいうところのおよそ 6 年生レベル、「コミュ英Ⅱ」がおよそ 7 ～ 8 年生レベル、「コミュ英Ⅲ」がおよそ 9 年生レベルといった具合に、科目が一段階上に移行する際に、使用教科書の難易度も 1 学年度分ずつ上昇している。なお、この難易度上昇の傾向は、Flesch Reading Ease で見た場合においても、同様に確認された（71.4 → 65.4 → 61.4）。

（表 9）Flesch-Kincaid Grade Level で見るコミュ英Ⅰ～コミュ英Ⅲへの推移

教科書タイトル	コミュ英Ⅰ	コミュ英Ⅱ	コミュ英Ⅲ
ELEMENT	5.4	8.2	9.0
Crown	6.1	7.4	7.9
PRO-VISION	7.2	7.9	9.0
UNICORN	6.7	7.9	10.7
PROMINENCE	7.4	8.9	9.5
WORLD TREK	5.7	6.3	8.0
Power On	6.6	7.0	7.3
BIG DIPPER	5.2	6.6	8.0
Mean	6.3	7.5	8.7

（大田（2016）を改編）

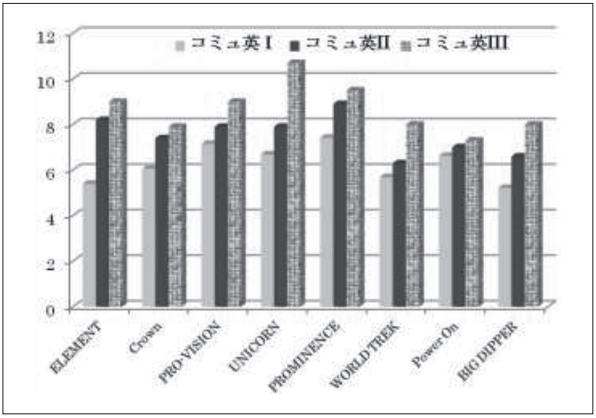

図 2　Flesch-Kincaid Grade Level で見るコミュ英Ⅰ～Ⅲの推移

6.3　中学検定教科書から高校検定教科書への難易度の推移

6.3.1　中学検定教科書（H28 年度改訂版）Book 1 ～ 3 の推移

大田（2016）で報告した中学検定教科書 6 冊の英文難易度の平均[4] は、

[4] 大田（2015，2016）では、Lesson / Unit / PROGRAM というタイトルのついた課の「本文」のみを分析対象とし、学校によって扱い方に軽重があると思われる Reading 用英文は対象外とした。同一条件で比較する必要があったため、本研究においても Reading 用英文は同様に対象外とした。

Lexile Measure で示すと、Book 1 が 90L、Book 2 が 338L、Book 3 が 485L であった。今回の H28 年度版では、Book 1 が 108L、Book 2 が 337L、Book 3 が 488L と、平均値に大きな変化は見られなかった。

投野（2016）は、H24 年度版と H28 年度版の教科書比較分析を行い、28 年度版で扱われる語い数（異なり語数）が 24 年度版から平均 1.5 倍以上増加し（Book 1：723 語 → 1,179 語、Book 2：1,035 語 → 1,685 語、Book 3：1,292 語 → 1,989 語）、教科書の総語数についても大幅に増加した（Book 1：252% 増、Book 2：240% 増、Book 3：204% 増）と報告している。一方で、本研究に際し、Lexile Measure 分析の対象とした各課の「本文」に限定した場合の総語数については、92％～ 114％の変化に留まった。

このことが意味するのは、今回の教科書改訂で量・質において大きな変化があったのは、各課の本文ではなく、むしろそれ以外の部分であるということである。例を挙げれば、各課の中に組み込まれる Activity の充実、3 ～ 4 課終了毎にそれまでの学習事項の復習として用意されるプロジェクト型活動の充実、小学校外国語活動の学習内容との円滑な接続のための Book 1 の入門部分（ブリッジ部分）のページの増加、そして、本研究では対象外とした Reading 用英文の増加などが、量・質の変化をもたらしたと考察できる。よって、今回分析から外した Reading 用英文を加えて再分析をすれば、表 10、11 で提示した各教科書の Lexile Measure の平均値が、現在のものよりも高くなると予想される。

6.3.2　中学～高校 3 年の 6 年間の教科書難易度の推移

ここまで別々で見てきた中学検定教科書の難易度と高校検定教科書の難易度の推移を、6 年分通して見ていくことにする。まずは Lexile Measure の平均値で比較していく。大田（2016）では、Book 1（中 1 用）と Book 2（中 2 用）間の難易度の差と Book 3（中 3 用）と「コミュ英Ⅰ」間の難易度の差が相対的に大きいと言及した[5]。今回、平成 28 年度版に基づく値に差し替えてもなお、その 2 か所の差が他と比べると大きいことが、表 12 と図 3 で確認できる。今回新たに「コミュ英Ⅲ」の数値が加わったが、一つ前の「コミュ英Ⅱ」との差（141L）は「コミュ英Ⅰ」と「コミュ英Ⅱ」との差（138L）とほぼ同程度であった。

前段階との差が最も顕著である中高接続の段階（Book 3 →「コミュ英Ⅰ」）は、今後も引き続き議論すべき問題である。それと同様に、「コミュ英Ⅲ」の

[5] 大田（2016）では中学検定教科書平成 24 年度版を使用。

Lexile Measure の平均が 1000L を超えているという点についても、生徒がコミュニケーション活動を行うのに支障ないレベル設定になっているのかという観点から、やはり議論すべき問題といえる。

（表 10）中学検定教科書平成 24 年度版と平成 28 年度版
Book 1 ～ 3 教科書別 Lexile Measure

	平成 24 年度版	平成 28 年度版
COLUMBUS 1	10	20
COLUMBUS 2	150	180
COLUMBUS 3	380	360
NEW CROWN 1	140	160
NEW CROWN 2	440	390
NEW CROWN 3	470	470
NEW HORIZON 1	40	100
NEW HORIZON 2	340	330
NEW HORIZON 3	460	510
ONE WORLD 1	120	140
ONE WORLD 2	330	400
ONE WORLD 3	530	560
SUNSHINE 1	140	80
SUNSHINE 2	430	390
SUNSHINE 3	540	510
TOTAL ENGLISH 1	90	150
TOTAL ENGLISH 2	340	330
TOTAL ENGLISH 3	530	520

（表 11）平成 24 年度版と H28 年度版 Book 1 ～ 3 の
Lexile Measure 6 冊平均

	Book 1	Book 2	Book 3
H24 年度版	90	338	485
H28 年度版	108	337	488

（表 12）中学～高校教科書の Lexile Measure の推移

教科書タイトル	Book 1	差	Book 2	差	Book 3	差	ECI	差	ECⅡ	差	ECⅢ
Lexile Measure 平均	108		337		488		777		915		1056
一つ前との差		229		151		289		138		141	

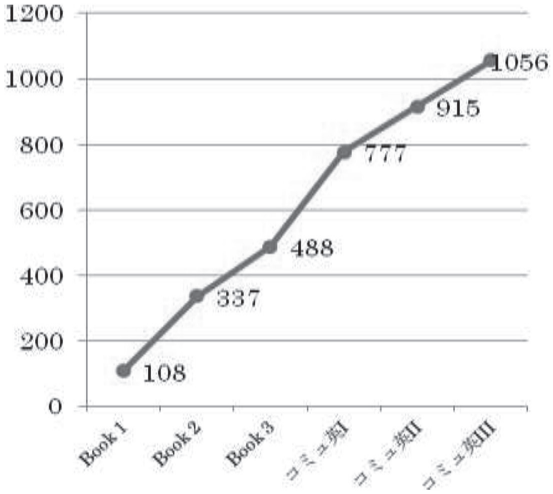

図 3　中学～高校教科書の Lexile Measure の推移

中学 1 年から高校 3 年までの 6 年間の教科書難易度の推移を、「一文の長さ」という観点でも見ていく。英文理解を妨げる要因には、ここで注目する「一文の長さ」以外にも、語彙の難しさ、文構造の複雑さ、topic familiarity の低さ（トピックに関する背景知識の不足）なども考えられる。しかし、ここでは、Lexile Measure / Flesh-Kincaid Reading Ease / Flesch-Kincaid Grade Level のいずれの測定にも採用されている Mean Sentence Length、すなわち「一文の長さ」に特化して結果を示す。

（表 13）中学～高校教科書の一文の長さの推移

教科書タイトル	Book 1	差	Book 2	差	Book 3	差	ECI	差	EC Ⅱ	差	EC Ⅲ
1 文の長さ 平均	4.78		6.55		7.98		12.22		13.65		15.79
一つ前との差		1.77		1.43		4.24		1.43		2.14	

中学教科書 Book 1 から「コミュ英Ⅱ」までの推移に言及した大田（2016）に、今回「コミュ英Ⅲ」の情報を新たに加えた。5 つある学年の変わり目で一番顕著な変化は、やはり Book 3 から「コミュ英Ⅰ」にかけての＋4.24 語という変化である。先ほど脚注 4 で説明した通り、今回の Book 1 ～ 3 の難易度測定の対象としたのは、いわゆる「単元」と呼ばれる箇所の本文のみである。平成 28 年度の教科書改訂により、教科書本体の総語数や異なり語数は平成 24 年度版よりも増加した（投野，2016）。対話形式がメインであった従来の中学教科書に、物語や説明文といったリーディング素材がより多く投入されたことや、課と課の間のアクティビティの充実度が増したことが起因している。本研究の教科書分析で対象外としたリーディング用英文も分析対象とし再分析すれば、Lexile Measure の数値と合わせ、一文の平均の長さもさらに長くなることが予想される。

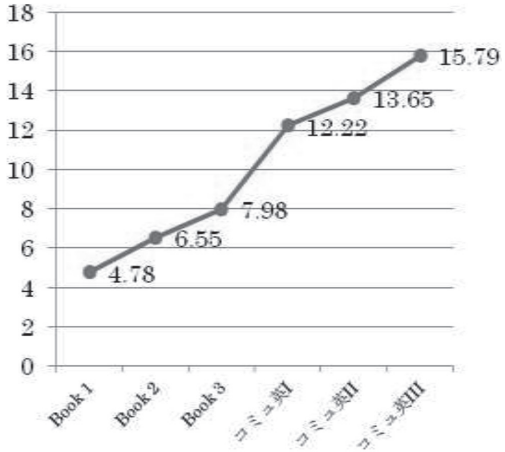

図 4　中学～高校教科書の一文の長さの推移

7. 中高英語学習の円滑な接続に向けて

今回分析対象とした教科書本文の中から、中学教科書に登場する説明文と高校教科書に登場する説明文を、以下に一例ずつ提示する。（文章内のスラッシュ（ / ）は本研究者が追加）

中学検定教科書 Book 3 の英文の例（下記テクストの 1 文平均語数 8.1 語）

I am a doctor. / My passion is helping people. / In Japan, I was so busy that I couldn't keep my passion. / Then I saw a program on TV about refugee children. / It reminded me of my passion, so I joined a volunteer group. / I went to places with serious health problems. / I talked with patients there. / I worked with staff from the area and other countries. / Communication was often difficult. / With good will and hard work, we managed by using English. / English helps me to save lives. / I have got back my passion. / Now I am 'a doctor without borders' and use 'a language without borders'. （*NEW CROWN ENGLISH SERIES New Edition* 3, Lesson 7 English for Me, pp. 92 から抜粋）

高校検定教科書コミュ英 I の英文の例（下記テクストの 1 文平均語数 12.3 語）

Plants that talk to people are only seen in fantasy stories. / However, recent scientific research shows that plants can "communicate" with some insects around them in a special way. / How do they do this? / For example, when corn plants are being eaten by caterpillars, they send out a chemical into the air. / Humans do not notice it, but insects do. / The chemical attracts the natural enemies of the caterpillars: parasitic wasps. / With the help of these wasps, corn plants reduce the damage caused by the caterpillars. / The chemical signal may be compared to a cry for help. / Corn plants are in a sense calling out to their "bodyguards" to save them. （*PRO-VISION English Communication 1*, Lesson 5 Talking Plants, pp. 55-56 から抜粋）

枠内の 2 種類の英文を比べれば分かる通り、相対的に、中学教科書で扱われる文章の方が語いが易しめであり、1 文も短めである。一部の英文を除き、長くても 10 語程度である。一方で、そこから数か月後にその学習者が使用することになる（かもしれない）高校教科書になると、語いレベルが上がるだけでなく、1 文の平均語数も増加する。高校教科書になると、（特に中・上レベルの教科書に特徴的な傾向ではあるが）従属節を伴う複文が増えたり、後置修飾句によって一つ一つの意味のまとまりが大きくなったり、挿入句が増えたりし

て、学習者の意味処理への負担はますます大きくなる。ゆえに、中学を卒業した生徒が高校での授業に躓かないようにするための配慮が必要となる。

解決策の一つに、高校1年時の授業で一度に与えられる「英文量」に生徒が戸惑うことのないよう、中学の段階から、ある程度まとまった量の英文を読むことに慣れさせておく、という策が考えられる。これは中学英語教師の役目になる。このためには、教師は中学教科書において一般的な形式となっている対話文を使った言語活動のバリエーションだけでなく、比較的長め(400～500語)の英文を使ったリーディング活動のバリエーションも持ち合わせておく必要があるだろう。

別の解決策として、高校1年時に使用する教科書の難易度を、Book 3レベルにやや近づける、つまり難易度レベルをやや落とすという対策も可能である。こちらは高校教員の役目になる。大田（2015，2016）と本研究では、分析対象とした教科書の選定基準について、「大学進学希望者を抱える平均的な高校が採用していると想定される教科書の中から学習指導要領改訂前後で教科書タイトルに変更のない8種類」と言及している。教科書会社によっては、高校用の教科書として、各学校が、生徒の英語習熟度や学校の教育課程の配当単位数に応じて、教科書を自由に採択できるように、レベルの異なる2種類ないし3種類の教科書を用意している。3種類の場合、（その位置づけは各社の判断によるが）上級レベル・中級レベル・初級レベルで用意されているのが一般的である。今回分析対象とした高校英語教科書8種類（表4）でいうと、1～5の「ELEMENT」「Crown」「RRO-VISION」「UNICORN」「PROMINENCE」が高校教員の一般的な感覚でいうところの上級レベルの教科書、「WORLDTREK」「Power On」「BIG DIPPER」が中レベルの教科書になる。

では、その3レベルの設定があるとすると、その3番目（初級レベル）に位置づけられる教科書はどれくらいの難易度なのだろうか。「Crown」と同社の「Vista」、Prominenceと同社の「All Aboard」、「Big Dipper」と同社の「Comet」の3冊で確認したところ、これら3冊のLexile Measureはそれぞれ520L、560L、460Lであった。現在、上級・中級レベルに集中している教科書採択ではあるが、仮に教科書レベルを1ランク（または2ランク）落としてみると、中高の教科書難易度の開きは、かなり改善されることになる。

ところで、高校生は「中学英語」をきちんと理解した状態で高校へ入学してくるのだろうか。高校では新しい語彙や新しい文法項目が導入される。これまで、教師は伝統的に、「読むための教材」という視点で教科書を選定してきた。簡単な教科書では「読む力」を伸ばすことはできないと考え、生徒の英語力を

必ずしも反映しているとは言えない「難しい」教科書を好んで使う傾向にあった。ここで考えるべきことは、生徒に新しい文法項目・より難しい語彙を与える前提として、その生徒達はそもそも中学で教わったことをきちんと身につけているのかどうか、という点である。

金谷ほか（2017）[6] が 2016 年 1 月～ 6 月に全国の高校 1 年生～ 3 年生 5000 名近くを対象に行った中学英語基礎定着調査によると、中学 3 年の教科書本文を高校生が「理解しながら」読める速度は、平均で 73 wpm（words per minute）だった。中学レベルの英文であっても、1 分間に 70 語程度しか読めないということになる。また、中 1 ～中 3 のそれぞれのレベルで用意したリスニングテストの結果も、正答率は平均で 60％であった。さらには、中学英語で解答可能な和文英訳問題（10 問）において、7 割以上の正確さで英文を書けた高校生は全体の約 1 割しかいなかった。これらの結果から得られる示唆は、中学で教えたことは中学で完結するものではないということ、中学で導入した事項を定着させるのが、実は高校の英語の授業の役割であり、教師の役割である、ということである。

「コミュニケーション英語」の授業で、生徒の内容理解を促しその先の言語活動にまで生徒を誘導するために、どの程度の難易度の教材を用意すべきかが大変重要な問題になってくる。よって、学年が上がるから教科書の難易度もそれに合わせて上げていかなければならない、というこれまで当たり前としてきたルールも、必ずしも当たり前とは言えないということになる。

8. まとめ

今回の教科書分析で明らかになったことは、以下の通りである。

RQ（1）「コミュ英Ⅲ」と「Reading」の教科書本文には、難易度に違いが見られるか？

→分析対象とした 8 組の差を、Lexile Measure / Flesh-Kincaid Reading Ease / Flesch-Kincaid Grade Level の 3 種類の Readability 指標を使って比較したところ、どれを採用しても「コミュ英Ⅲ」の方が旧課程「Reading」よりも英文難易度がやや高いという傾向が見られた。「コミュ英Ⅲ」が、「Reading」よりもコミュニケーション活動をしやすい、つまり、活動に入る前に済ませておかなければならない「内容理解」の時間がより短時間で済むような英文になっているとは

[6] 2017 年 2 月刊行予定（アルク）

言い難い。

RQ（2）「コミュ英Ⅰ」から「Ⅲ」にかけて、Lexile Measure と 1 文の長さはどう変化するか？

→コミュ英Ⅰ（777L）→Ⅱ（915L）→Ⅲ（1056L）と右肩上がりに数値が上がっている。1 文の長さの平均についても、平均 12.2 語→平均 13.7 語→平均 15.8 語と、ますます長くなっている。センター試験の長文問題が 1000L 前後であることを考えると、教科書を読解トレーニング用の教材と割り切れば、良質の教材かもしれない。しかしながら、「コミュニケーション英語」は読解力向上のみを目的とする科目ではない。話すことや書くことも含めたコミュニケーション活動を積極的に行うための教材として最適かどうかという観点を考慮すると、さらに検証を続ける必要がある。

RQ（3）中学 Book 1 →「コミュ英Ⅲ」の 6 年間の推移から何が分かるか？

→中学校 1 年から高校 3 年のそれぞれの学年間で使用される教科書の難易度平均を比較すると、（中学教科書については 6 種類全ての平均、高校教科書については任意の 8 種類に限定しての平均ではあるものの）Lexile Measure / Flesh-Kincaid Reading Ease / Flesch-Kincaid Grade Level の 3 種類の Readability 指標のどれで見ても、中学 3 年用 Book 3 と高校 1 年用「コミュ英Ⅰ」の間の差が最も顕著だった。その主な原因の一つに、一文の平均語数の違いがある。「コミュ英Ⅰ」で英文が急激に長くなってしまう。このことで「コミュニケーション活動」をアクティブに行うための下準備である本文理解に、かなりの負担がかかっていることが推測される。

最後に

2020 年度（平成 32 年）より「小学 3 年からの外国語活動必修化」と「小学 5 年からの英語教科化」が完全施行となることを受け、小学校英語教育を論じた記事や書籍が目白押しである。小学校 5・6 年での英語教科化を受け、今後の中学の英語教育はどうあるべきか、小中の円滑な英語教育のために何をすべきか等、現在最も注目を集めているトピックの一つが「小学校英語教育」であり「小中連携」であることは間違いない。しかしながら、今議論すべきテーマは、何も小中連携だけではない。中高連携も同等に重要な問題といえる。中高での授業形態の違いや高校での教材の難しさが、高校 1 年で英語学習に躓く原因（の一部）になっている（ベネッセ教育研究所，2014）。「高 1 ギャップ」に

苦しむ生徒を少しでも減らすために、また、高校の英語の授業にコミュニケーション活動をより積極的に導入するために、言語活動の実行可能性を最大限に引き出すことのできる教材レベルの設定が急務である。

謝辞

本研究および大田（2016）は、平成 27 ～ 29 年度科学研究費助成事業基盤研究（C）「高校英語教科書の難易度とそれを使用する学習者の読む力とのギャップの解明」（課題番号 15K02801）の助成を受けたものである。

引用文献

浅羽亮一ほか.（2008）. *WORLD TREK ENGLISH COURSE II.* 東京：桐原書店.

浅見道明代表.（2014）. *Power On Communication English II.* 東京：東京書籍.

浅見道明代表.（2015）. *Power On Communication English III.* 東京：東京書籍.

アダチ徹子ほか.（2016）. *SUNSHINE ENGLISH COURSE 1, 2, 3.* 東京：開隆堂出版.

板垣信哉ほか.（2012）. *SUNSHINE ENGLISH COURSE 1, 2, 3.* 東京：開隆堂出版.

市川泰男ほか.（2014）. *UNICORN English Communication 2.* 東京：文英堂.

市川泰男ほか.（2015）. *Unicorn ENGLISH Communication 3.* 京都、東京：文英堂.

市川泰男ほか.（2009）. *UNICORN ENGLISH READING NEW EDITION.* 京都、東京：文英堂.

上地安貞 ほか.（2008）. *PROMINENCE English Reading.* 東京：東京書籍.

卯城祐司ほか.（2007）. *ELEMENT English course II.* 大阪：新興出版社啓林館.

卯城祐司ほか.（2013）. *ELEMENT English Communication II.* 大阪：新興出版社啓林館.

卯城祐司ほか.（2014）. *ELEMENT English Communication III.* 大阪：新興出版社啓林館.

大熊昭信 ほか.（2007）. *ELEMENT English reading.* 大阪：新興出版社啓林館.

大田悦子.（2015）.「Lexile Measure で表す高校英語検定教科書の難易度―コミュニケーション英語Ⅰと英語Ⅰの比較―」.『白山英米文学』第 40 号，41-56.

大田悦子.（2016）.「Lexile Measure を用いた中高英語教科書の難易度比較」.『白山英米文学』第 41 号，1-20.

金谷憲，臼倉美里，大田悦子，鈴木祐一，隅田朗彦.（2017）『高校生は中学英語を使いこなせるか？―基礎定着調査で見えた高校生の英語力』東京：アルク　※ 2017 年 2 月刊行予定

金子朝子ほか.（2013）. *VISTA English Communication 1.* 東京：三省堂.

清田洋一ほか.（2013）. *ALL ABOARD! Communication English I.* 東京：東京書籍.

笠島準一代表.（2012）. *NEW HORIZON English Course 1, 2, 3.* 東京：東京書籍.

笠島準一代表.（2016）. *NEW HORIZON English Course 1, 2, 3.* 東京：東京書籍.
COLUMBUS21 編集部ほか.（2016）.「教科書編集担当者に聞く一押し教材・改訂ポイント」『英語教育』2 月号，28-31. 大修館書店.
塩澤利雄ほか.（2008）. *PRO-VISION ENGLISH READING New Edition.* 東京：桐原書店.
静哲人ほか.（2009）. *Power On English Reading.* 東京：東京書籍.
霜崎實ほか.（2011）. *CROWN English Series II New Edition.* 東京：三省堂.
霜崎實ほか.（2014）. *CROWN English Communication II.* 東京：三省堂.
霜崎實ほか.（2015）. *CROWN English Communication III.* 東京：三省堂.
霜崎實ほか.（2009）. *CROWN English Reading New Edition.* 東京：三省堂.
神保尚武編著代表.（2011）. *Power On English II.* 東京：東京書籍.
高橋貞雄ほか.（2013）. *NEW CROWN ENGLISH SERIES 1, 2, 3.* 東京：三省堂.
田中茂範ほか.（2014）. *PRO-VISION English Communication II.* 東京：桐原書店.
田中茂範ほか.（2015）. *PRO-VISION English Communication III.* 東京：桐原書店.
田辺正美代表.（2014）. *PROMINENCE Communication English II.* 東京：東京書籍.
田辺正美ほか.（2015）. *PROMINENCE Communication English III.* 東京：東京書籍.
田辺正美代表.（2008）. *PROMINENCE English II.* 東京：東京書籍.
寺内正典ほか.（2009）. *WORLD TREK ENGLISH READING NEW EDITION.*
東後勝昭ほか.（2012）. *COLUMBUS 21 ENGLISH COURSE 1, 2, 3.* 東京：光村図書出版.
東後勝明ほか.（2016）. *COLUMBUS 21 ENGLISH COURSE 1, 2, 3.* 東京：光村図書出版.
投野由紀夫.（2016）.「教科書語彙の「調理法」と「品質管理」中学校改訂版教科書の語彙レベルと語数」『英語教育』2 月号，17-19. 大修館書店.
西光義弘ほか.（2012）. *COMET English Communication I.* 東京：数研出版.
根岸雅史.（2015）.「Lexile Measure による中高大の英語教科書のテキスト難易度の研究」『ARCLE REVIEW No. 9』6-16.
根岸雅史ほか.（2016）. *NEW CROWN ENGLISH SERIES New Edition 1, 2, 3.* 東京：三省堂.
畠山利一ほか.（2014）. *BIG DIPPER English Communication II.* 東京：数研出版.
畠山利一ほか.（2015）. *BIG DIPPER English Communication III.* 東京：数研出版.
原口庄輔ほか.（2011）. *PRO-VISION English course II New Edition.* 東京：ピアソン桐原.
松坂ヒロシほか.（2009）. *BIG DIPPER Reading Course.* 東京：数研出版.
松本茂ほか.（2011）. *ONE WORLD English Course 1, 2, 3.* 東京：教育出版.
松本茂ほか.（2016）. *ONE WORLD English Course 1, 2, 3.* 東京：教育出版.
望月正道ほか.（2014）. *WORLD TREK English Communication II.* 東京：桐原書店.
望月正道ほか.（2015）. *WORLD TREK English Communication III.* 東京：桐原書店.
森岡裕一ほか.（2011）. *BIG DIPPER English Course II.* 東京：数研出版.

文部科学省.（2010）.「高等学校学習指導要領第 2 章第 8 節外国語」『高等学校学習指導要領解説外国語編・英語編』.
文部科学省.（1999）.『文部科学省高等学校学習指導要領 第 2 章普通教育に関する各教科 第 8 節外国語』（http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/cs/1320179.htm）.
矢田裕士、吉田研作ほか.（2012）. TOTAL ENGLISH NEW EDITION 1, 2, 3. 東京：学校図書.
矢田裕士、吉田研作ほか.（2016）. *TOTAL ENGLISH NEW EDITION 1, 2, 3.* 東京：学校図書.

URL

独立行政法人大学入試センター平成 28 年度本試験（外国語：英語）
http://www.dnc.ac.jp/albums/abm.php?f=abm00007113.pdf&n=%282805%292801-0901+eigo.pdf, http://www.dnc.ac.jp/data/shiken_jouhou/h28/jisshikekka/H28honshi_mondai.html
ベネッセ教育総合研究所 .「中高生の英語学習に関する実態調査 2014 速報版」
http://berd.benesse.jp/up_images/research/Teenagers_English_learning_Survey-2014_ALL.pdf
MetaMetrics. The Lexile® *Framework for Reading.*
http://www.lexile.com/about-lexile/lexile-overview/
文部科学省高等学校旧学習指導要領平成 11 年度版
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/cs/1320179.htm
The Lexile Framework for Reading
https://www.amazon.co.jp/b/?node=3948232051